

空間のダイクシス II

森 光 有 子

拙稿（1988）では、場面内指示に関する *there* 構文（Deictic *There*-Constructions（以下、DTC））における場面内指示語 *here* と *there* に関わる要因について検討した。それは、*here* と *there* の用いられ方が最も初期的なのは DTC においてであり、故に、これらの語の特徴が最も良く見出だされるのは DTC においてである、という考えからであった。

そこで挙げられた要因は、*here* については5つ、*there* については6つであるが、その中の中心となる要因において問題とされるのは、発話時における、話し手を原点とした発話の関与者（物）の相対的位置であり、その中心となる要因が機能している DTC を原型、それ以外はすべて原型からの比喩的拡大と考えた。

本稿では、まず、DTC 以外の構文に場面内指示語 *here* あるいは *there* が生じている例¹を観察し、DTC における *here* と *there* の特徴がどのように関わっているかを見る。さらに、やはり場面内指示語である *this* と *that* についても考察を加える。

1. DTC 以外の構文における *here* と *there*

場面内指示語 *here* と *there* の特徴は DTC の *here* と *there* に最も良く見出だされるという立場にたつと、DTC のときに挙げた要因（のいくつか）は基本的に DTC 以外の構文における *here* と *there* にも関わると考えられる。

DTC の *here* と *there* に関して挙げられた要因から、DTC 以外の構文における *here* と *there* に関わる要因として予想されるのは、次の ①-③ である。

- ①物理的空間が話し手の領域内か領域外か。
- ②時間的に話し手の領域内か領域外か。
- ③主体の態度によって決定される話し手の領域内と領域外（心理的に話し手の領域内か領域外か）。

では、例文と照らし合わせながら、これらの要因をもっと詳細に検討していくことにしよう。

1. 1. 要因 ①：物理的空間が話し手の領域内か領域外か

場面内指示語は、話し手との関係においてのみその特徴が明らかにされる。話し手のいる場所、話し手に近い場所は物理的に話し手の領域内の場所といえるが、これはふつう、*here* で表される。一方、話し手のいない場所、話し手から離れた場所は物理的に話し手の領域外の場所

であるが、これはふつう、there で表される。実際の談話状況は話し手と聞き手がいなくては成り立たないことを考えた上で、here と there がカバーする物理的領域を図示すると、次の図1の [A] あるいは [B] のようになる。

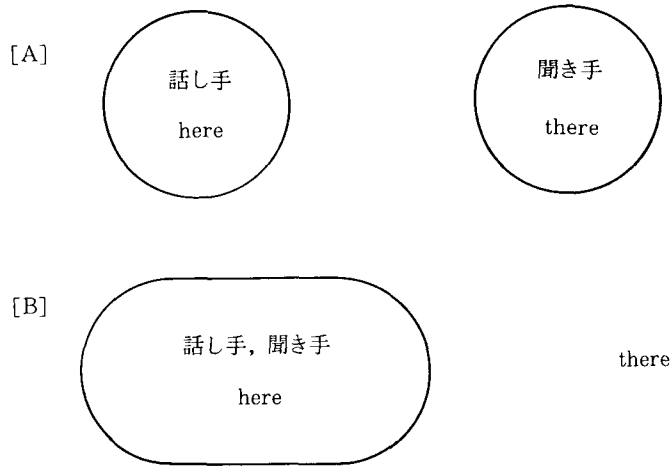


図 1

次の例 (1) - (4) はすべて、この [A] か [B] のいずれかで説明される。

- (1) Come *here* !
- (2) That's why we're *here* today....

例 (1) は、話し手が発話時に自分から離れた所にいる聞き手に向かって言っていることばであるから、here は話し手のみのいる所を指す。従って、図1の [A] によって表される状態である。しかし (2) では、“we” は話し手と聞き手の両者を含んでおり (すなわち、包括の we (inclusive “we”))、here はその両者がいる所でなければならない。故に、[B] に示される状態となる。このように、(1) と (2) では、話し手が自分のみの領域を作っているか、あるいは自分の領域内に聞き手の領域をも吸収してしまっているかの点で相違はあるが、いずれにしても、here は話し手の領域内を表すということには違いない。

次に、there の例を見てみよう。

- (3) Can you pass me that book *there* ?

(4) A : Where should I put this?

B : Over *there* on that shelf.

(3) では話し手は、発話時に聞き手の近くにある本を取ってほしいと言っているのだから、*there* は話し手から離れた場所であり、かつ、聞き手に近い場所ではなければならない。つまり、*there* は話し手の領域外、かつ聞き手の領域内の場所である。図では [A] の方になる。一方(4)では、話し手と聞き手とは互いに近くにいると考えられるので、*there* は、話し手から離れているが、また同時に、聞き手からも離れている場所である。つまり *there* は、聞き手の領域をも吸収してしまっている話し手の領域の外の場所であるということになる。図では [B] で表される状態である。

例(1) - (4)で具体的に示されたように、話し手の領域内の場所、領域外の場所といっても、さらに細分することが必要であり、要因①は詳細には次のように表される。

要因①：物理的空間が話し手の領域内か領域外か

here : 物理的に話し手の領域内の空間を指す。

{ 話し手のみの領域内の空間を指す。
聞き手の領域をも吸収した話し手の領域内の空間を指す。

there : 物理的に話し手の領域外の空間を指す。

{ 聞き手の領域内の空間を指す。
聞き手の領域をも吸収した話し手の領域の外の空間を指す。

以上、物理的な空間が話し手の領域内か、あるいは領域外かという要因で説明される例を見た。次の1.2.でもやはり、話し手の領域が問題となる。

1.2. 要因②：時間的に話し手の領域内か領域外か

拙稿(前出)では、DTCにおける*here*と*there*に関わる要因の一つとして、*here*は(現在から)未来と、*there*は過去(から現在)と関わる、という要因を挙げた。DTC以外の構文の場合にも、このことは当てはまるようである。まず、次の例を見てみよう。

(5) At last the holidays are *here*.

この例では、話し手はやっと休暇になったと喜んでいるのである。これは、休暇が今この時に始まり、これからしばらく続くというときの発話であるから、*here*は現在から未来と関わるといえよう。それでは(6)はどうであろうか。

(6) Don't tell me, kid. I was *there*. [原文イタ]

この発話がなされた背景は次のようである。ある老人がひとりの若者に向かって60年前の出来事について説明しているときに、その若者が自分もその出来事について知っていると言って、老人のことはを述べて話し出した。そこで老人は「私はその時にいたんだぞ」と言って、君のような若者と違って私は60年前のその時に既に存在しており、だから事実をよく知っているのだ、という気持ちを表したかった。このような状況での発話であるから、*there* が過去のある時を指しているのは明らかである。

ダイクシスの概念として、座標の原点には常に話し手が、そして時間的には、発話時の「今、この時」が位置する。そうすると、先の2例についていえば、(5)におけるように、今、あるいは今からという時は原点（の近く）に位置する時であるから、話し手にも近い時であり、一方、(6)に見られるように、60年前という過去は原点から離れた所に位置する時であるから、話し手からも遠い時である。前者は話し手の領域内の時、後者は話し手の領域の外にある時といえよう。

このように、DTC以外の構文においても、基本的に場所を表す *here* と *there* は、時間的に話し手の領域内か領域外かを表すのにも用いられるということが示された。時の流れを直線として捉え、これを図示すると、図2のようになる。

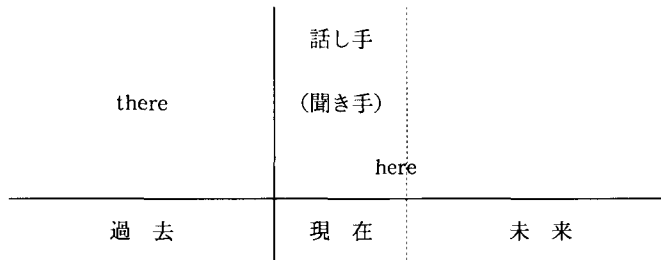


図 2

また、要因②は次のように表される。

要因②：時間的に話し手の領域内か領域外か

here：現在（から未来）という座標の原点（の近く）に位置する時、すなわち、時間的に話し手の領域内の時を指す。

there：過去という座標の原点から離れたところに位置する時、すなわち、時間的に話し手の領域の外にある時を指す。

では最後のケースとして、話し手の態度によって、*here* と *there* 間の選択がどのように決定されるのかをしてみることにしよう。

1.3. 要因 ③：主体の態度によって決定される話し手の領域内と領域外（心理的に話し手の領域内か領域外か）

話し手の領域の設定が、主体である話し手自身の態度によって決定される場合がある。まず、例（7）を見よう。

(7) I seek *here* for some friends. I will look round—perhaps they are not *here* yet. Ah, let me see, that table *there* in the corner

最初話し手は、発話時に自分がいる店全体を話し手の領域と考えていたので、店全体が *here* で表されているが、その後、その同じ店の中で境界線を引き、話し手の領域内の場所 (*here*) と領域外の場所 (*there*) とを区別した。たった今まで *here* と捉えられていた所が、次の瞬間には *there* として見られるのである。主体の態度が、最初に *here* を使用しているときと、後で *there* を使用するときとの間で変化しており、それに従って、話し手の領域も変化している（ここでは、狭まっている）。このように、物理的には同一の空間が、主体（話し手）の態度変更によって異なった見方をされ、それは実際の言語表現に反映される。

また、話し手が実際にはいない場所でも、そこが自分のいる場所と見做しさえすれば、どんな所でも「ここ (*here*)」になり得る。例えば、地図上の一点を指し示しながら、(8) のように言うことができるのである。

(8) I'll go *here*.

主体（話し手）の態度によって話し手の領域が設定される、という特徴がうまく生かされていると思われるのは、小説などにおいてである。(9) を見てみよう。

(9) His decision took him to the nearest post office. *Here* he put through a couple of telephone calls.

here で表されている場所には、現実には、主体である語り手（話し手）はいない。いるのは主人公（“he”）である。では何故 *here* なのか。語り手は常に主人公にぴたっとくっついて離れず、主人公の行く所へはどこへでもお供をしている陰の存在と考えればよい。すると語り手は、主人公のいる所は自分のいる所であると見做すことができる。実際にはいない場所を自分の居

場所として見るためには、自分の居場所に対する態度を実際にはいない場所にもとればよいのである。そしてそれは、自分の居場所を表すことばをそのまま実際にはいない場所に用いることで実現できる。故に語り手はここで、自分の領域内を表す *here* を用いているのである。

この用法はなにも場所を表す場合の *here* と *there* にのみ限られているわけではない。時を表す場合でも同様である。語り手が座標をどのように設定するか、その設定の仕方次第で、どんな時点でも「今」となり得る。

次に挙げる (10)、(11) は、時を表す *here* と *there* の例である。この2例は次のような場面で出てくる。すなわち、主人公は1985年の「現在」から、タイムマシンに乗って未来に行ったが、その未来でのことを語り手が語っている、という場面である。まず、(10) を見てみよう。

- (10) And Biff's attitude back in 1955 was almost exactly like his grandson's,
here in the future.

現実には、タイムマシンで過去や未来に行くことなど不可能であり夢物語であるが、たとえ過去や未来でも、その時を自分の存在する時と語り手が見做しさえすれば、「今」となる。例(9)と同様、この例でもやはり語り手は、ビフとその孫息子を眺めている主人公にぴったりくっついており、主人公のいる時点が自分のいる時点であると見做している。前述のとおり、この時主人公は未来にいたので、語り手は自分も未来にいるとする。このような態度は、自分のいる時を表すことばをそのまま実際にはいない時に対して用いることで実現されるので、語り手は自分のいない未来に対して語り手の領域内の時を指す *here* を用いている。

(11) はタイムマシンで行った未来で主人公(マーティ)が思ったことを、語り手が語っている例である。

- (11) After all, this was the same man who got him safely out of the past and
back to good [old 1985—even] though Marty hadn't stayed *there*.

この例でも、語り手はやはり主人公にぴったりくっついていて、従って、語り手は自分は未来にいと見做すことができる。これは、未来を座標の原点「今」と設定することになるので、本当は「今」である時が過去となる。現実には「今」である1985年も“good old 1985 (古き良き1985年)”と化す。そして、主人公も語り手もいない1985年という「過去」は語り手の領域の外にある時であるから、*there* で表される。

例(10)、(11)で示されたように、語り手は任意にある時点を「今」と設定し、その「今」から見た過去、現在、未来を問題にすることができる。

以上1.3.では、主体の態度によって話し手(語り手)の領域が決定するという例を見てき

た。これはさらに2つの異なるケースに分かれるが、まとめて要因③として次のように表される。

要因③：主体の態度によって決定される話し手の領域内と領域外（心理的に話し手の領域内か領域外か）

- a：物理的には同一の空間を指示する場合でも、話し手が発話時に自分の領域に属すと考えている場合には here が、自分の領域の外にあると考えている場合には there が用いられる。
- b：実際には語り手（話し手）がいない場所／時でも、そこが自分のいる所／時と見做しさえすれば、そこは空間的／時間的に語り手（話し手）の領域内となり、here で表される。逆に、実際には自分がいる場所／時でも、そこを自分のいない場所／時と見做せば、そこは語り手（話し手）の領域外となり、there で表される。

これらは、話し手の領域の心理的な決定の仕方であるといってもよい。先の図1は物理的な領域を示した図であるが、心理的な領域も同じ図で表され、ここで扱われた場所に関する例は図1で説明される。また、時に関する例は図2で説明されるであろう。

1.4. DTCのときに関わった要因との関係

DTC以外の構文に生じている here あるいは there を説明するのは、要因①—③ということになった。この3つの要因は、DTCの here と there に関わる要因——前述の通り、5つあるいは6つ——の内の3つと深く関係する。²

これで、DTCにおける here と there の要因と、DTC以外の構文における here と there の要因とは、互いに深い関わりを持つことが示されたが、2では、要因①—③の3つの要因間の関係について考える。

2. 3つの要因間の関係

要因①—③はいずれも話し手の領域を問題とするが、それぞれ、空間的（物理的）な面、時間的な面、心理的な面において問題としていた。これら3つの要因は、DTCの場合と同じように、中心となる要因と比喩的な要因とに分けられると思われるが、いずれがどの要因であるのか。

そもそもダイクシスというのは、“indicating”あるいは“referring by pointing”という意味である。すなわち、話し手が発話時に置かれている現実の発話状況の中で、そこに存在する指示物を、ある時にはジェスチャーを伴って指し示すことによって言及するというのである。とすればまず、DTCの場合と同様、要因①が中心になければならない。そして、②と

③ が比喩的要因ということになる。

②の時間的な要因に関してであるが、「基本的にわれわれは空間的なものの助けを借りることなしには時間をとらえることはできない」³のである。従って、場所を表す場面内指示語が比喩的に、本来の意味とは別の、時間を表す場合にも用いられている。

要因③も比喩的要因であるが、②とは性質が異なる。すなわち、③では主体の態度(変更)が根底にあり、それが表面的特徴となって言語表現に現れているのである。例えば、主体のとする態度のために、本来ならば there が用いられるべきところで、here が選ばれるのである。話し手(語り手)が現実にはいない場所/時を「ここ」/「今」と見做すということは、座標を本来あるべき位置から移動させ、視点を変えるということであるから、基本的な空間的・時間的要素をいったん頭の中で解釈し直すという過程を経ていることになる。これは明らかに派生的である。そして要因③は要因①から比喩的に派生してきているだけではなく、時が関する場合には、要因②からの派生もそこに組み込まれると考えなければならないだろう。

以上、要因①が中心となる要因、②と③が比喩的要因ということになった。比喩は、空間→時間、空間(時間)→心理の方向に働くということである。

では次に、this と that について考えていくことにしよう。

3. this と that

this と that は、here と there と空間的に同じ広がりをもつと考えられる。故に、here と there に関わっていた要因はこれら2語にも作用していると推測することができる。this と that に関わっている要因として提案したいものはおおよそ次のようになる。

- ① 空間的に話し手の領域内のものを指すか領域外のものを指すか。
- ② 時間的に話し手の領域内か領域外か。
- ③ 主体の態度によって決定される話し手の領域内と領域外(心理的に話し手の領域内のものを指すか領域外のものを指すか)。

以下、this と that について検討していくことにする。

3.1. 要因①：空間的に話し手の領域内のものを指すのか領域外のものを指すのか

3.1.1. this は here と、that は there と、空間的に同じ領域をもつ場面内指示語である。故に、this は話し手の近くにあるもの——空間的に話し手の領域内のもの——を、一方 that は話し手から離れているもの——空間的に話し手の領域外にあるもの——を指し示すということになる。this と that が空間的に占める領域を図示すると、図1での here と there をそれぞれ this と that に変えただけで出来上がり、図3のように表される。

さっそく例を見ていくことにしよう。まず、this が用いられている例である。

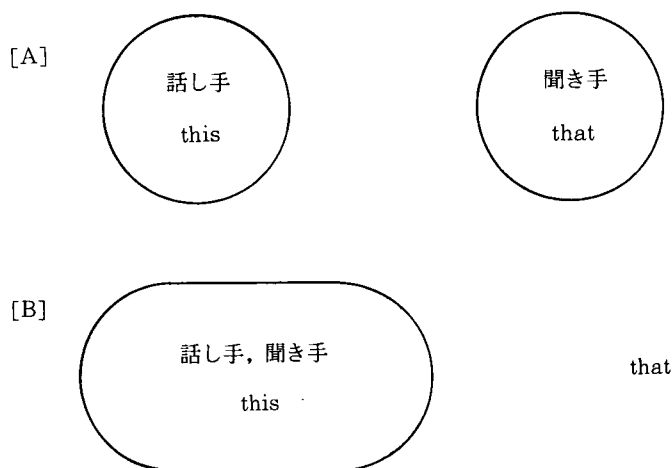


図 3

(12) Type *this* letter, please;....

(13) You are alone and friendless in *this* country.

(12) では、話し手が自分もっている手紙をタイプしてほしいと聞き手に頼んでいるのであるから、“letter” は発話時には空間的に話し手の領域内、かつ聞き手の領域外になければならない。従って、図3の [A] に示される状態となる。一方、(13) の “country” には話し手と聞き手の両者がいるのであるから、this は [B] の図に表されるように、聞き手の領域をも吸収した話し手の領域を指す。このように、(12) と (13) とでは聞き手の領域を含むか否かで相違点はあるが、“letter,” “country” のいずれも発話時には空間的に話し手の領域内にあるものであるから、this が用いられる。

次に、that が生じている例を見る。

(14) Give me *that* filthy lollipop, Marvin! Don't put it in your mouth!

(15) I see at *that* table an acquaintance of mine. I must go and speak to him.

(14) の that は発話時に聞き手のマーヴィンが持っている汚いキャンデーを指している。話し手はそのキャンデーを自分よこしなさいと聞き手に言っているのであるから、キャンデーは空間的に話し手の領域の外、かつ聞き手の領域内になければならない。図では [A] のようになる。(15) では、話し手と聞き手とは発話時には互いに近くにおり、that は両者から離れた場所にあるテーブルを指す。すなわち、テーブルは聞き手の領域をも含んだ話し手の領域の外にあることになり、[B] の図の状態となる。いずれの例においても、that は発話時には空間的に話し手の領域の外にあるものを指し示すのに用いられている。

さて、(16) と (17) の this と that はいずれも「のど」という身体の一部を指している。

(16) *This* throat's better, thanks.

(17) How's *that* throat?

話し手は、(16) では自分ののどに言及し、(17) では聞き手ののどについて尋ねている。従って、(16) の *this* は「わたし (話し手) の」、(17) の *that* は「あなた (聞き手) の」位の意味と解釈できよう。話し手ののどは話し手以外の誰のものでもなく、また同様に、聞き手ののどは聞き手以外の誰のものでもない。故に、いずれも [A] の図で説明される。⁴

ここで扱われる *this* と *that* は 1.1. の *here* と *there* と同じ空間的広がりをもつので、*this* と *that* に関する要因①は、次のように、*here* と *there* の要因①と明らかに共通点の多い形で表される。

要因①：空間的に話し手の領域内のものを指すのか領域外のものを指すのか

this: 空間的に話し手の領域内にあるものを指す。

- { 話し手のみの領域内にあるものを指す。
- { 聞き手の領域をも吸収した話し手の領域内にあるものを指す。

that: 空間的に話し手の領域外にあるものを指す。

- { 聞き手の領域内にあるものを指す。
- { 聞き手の領域をも吸収した話し手の領域の外にあるものを指す。

3.1.2. 3.1.1. で問題になった指示物はすべて、純粋に空間的広がりをもつもの (“country”) か、あるいは具体的な物で、実物を指示することができるもの (“letter,” “lollipop,” “table,” “throat”) であった。しかし、そのいずれにも属さない、人のことばや行為、また関心事や知識といったような抽象的なものが指示物であることもある。つまり、抽象的なものが話し手の領域内にあるのか領域外にあるのか、ということが問題となる。

この場合の領域は、実際は物理的なものではないが、「われわれは空間内で考える」⁵ であるから、抽象的なものを具体的な物として捉えれば、それは見かけ上、空間内に存在することになり、抽象的なものにも物理的領域を適用して考えることができるようになる。すると、それを指示する *this* と *that* も、空間に関わる要因①で比喩的に説明することができる。

では、例を見ていこう。

(18) You'll hang for *this*, you dirty dog.

(19) Maybe I shouldn't be doing *this*.

(18) は少し長めの発話の終わりの一文であるが、この発話で話し手は聞き手の罪を指摘してい

る。すなわち、this は同じ発話内でその直前に話し手自身が言ったことを指す。また (19) の this は発話時に話し手のとっている行為を指す。話し手のことば、話し手の行為はいずれも話し手の領域内に属すと考えられる。一方、(20)、(21) の that は、それぞれ話し手以外の人のことば、行為を指す。

(20) “She had committed suicide?” said Poirot.

“That was the accepted verdict....”

(21) ... she telephoned at once when she got here. Then she went to leave her cloak and while she was doing *that* the other lady came out of the cloakroom and

(20) における話し手以外の人とは、この発話と同時に聞き手に切り替わった人である。すなわち、that は「あなた（聞き手）が今言ったこと」の意と解釈できる。故に、that が指すのは話し手の領域外、かつ聞き手の領域内にあるものである。また、(21) では話し手は第三者の行為を that で指示している。従って、that は聞き手の領域をも吸収した話し手の領域の外にあるものを指していることになる。(18) — (21) は、指示物が実物でないという点が (12) — (17) と異なるだけで、いずれも、比喩的なのであるが要因①で、そして図3の [A] か [B] で説明される。

次の (22)、(23) の this と that も抽象的なものを指している。

(22) ... you ought to be in on *this*, having had that letter and all.

(23) First idea was it was given to her in her food at dinner—but, frankly, *that* seems to be a washout.

(22) の this は、話し手と聞き手とが扱っている事件を指す。つまり、両者が発話時に関わっている関心事を指すのである。一方、(23) の that は、話し手と聞き手の両者が関心をもつ事件に関して、発話時にはもう話し手が興味を失っている考えを指す。前者は聞き手の領域をも包括している話し手の領域内の事柄を、後者は同種の領域の外のものを指すことになる。これらは [B] の図で説明される。

指示物が抽象的なものの場合をもう少し検討する。(24)、(25) を見てみよう。

(24) I was walking along the street when *this* girl came up to me ...

(25) Really? What makes you say *that*, M. Poirot?

(24) では、話し手は聞き手の知らない（と話し手が思っている）ひとりの“girl”を話題にし、その女性について何かを述べようとしている。Leech & Svartvik (1975) に従えば、“this girl”は誰か新しい人を談話に導入するときの表現で、“a girl I’m going to tell you about”の意となる。故に this は、((18)と同様、話し手自身のことばではあるが)、話し手のみの知識、よって話し手の領域内の知識を表す。一方 (25) の that が指すのは、((20)と同様、すぐ前に別の人（すなわち、聞き手のポワロ）が述べたことではあるが)、それまで話し手の知らなかったことである。この発話の開始と同時に聞き手に切り替わった人の知識である。故に、that は話し手の領域外、かつ、聞き手の領域内の知識を指す。これらは [A] の図で表される状態である。⁶

このように、this と that はそれぞれ、話し手の知識、聞き手の知識を表すことができるということがわかったが、では話し手と聞き手とが共通してもっている知識はどのように表されるのだろうか。

(26) *This is terrible!*

これは、話し手も聞き手も知っている新聞記事の内容を指しての発話であるが、話し手は発話時にはまだ新聞を手にして、読みながら言っているという状況である。この場合には、両者が共に知っていることは this で表されており、これは [B] の図に示されるとおりである。

ところが、Leech & Svartvik (前出) は、that は話し手と聞き手との共有する知識を表すとして、“It gives you *that* great feeling of clean air and open spaces.” という例を挙げている。彼らによれば、“*that* feeling”は“the feeling we all know about”ということである。“we”は聞き手を含む包括の we であるが、しかし、話し手と聞き手の両者が知っている知識は、例 (26) から、this で表されるはずではないか。この例は (26) と、また図3 [B] と矛盾しないのだろうか。

結論から先に言えば、何も矛盾しない。このような that は以下のように説明される。すなわち、話し手と聞き手とが共通してもっている「感じ」は、過去において両者が共に経験して得たものである。(両者の過去の経験は、3.2. で扱われるが、時間的に話し手と聞き手の両者の領域の外のものであり、これは that で表される。) 両者が過去の経験を通してもっている共通のものは、「例のあの」と指示することができるが、「例のあの」という言い方は、指示物を三人称として話し手と聞き手の両者の領域の外に置く言い方であり、これは図3 [B] で表されるとおり、that で指示される。

従って (26) と異なり、過去の経験から得た共通の知識を表すには that が適切であるということになる。次の (27) の that も同様に説明される。

- (27) *That* Miss Barrowby we wrote to—no wonder there's been no answer.
She's dead.

話し手（探偵の秘書）と聞き手（探偵）は協同で、事件の依頼者であるミス・バロビーに手紙を送り、それに返事が来ないのを不思議に思っていた。これは、その矢先にわかった事実を聞き手に報告している場面での発話である。従って、ミス・バロビーについては話し手も聞き手も過去に共通する体験と知識とをもっている。すると話し手はミス・バロビーを「例のあの」と表現することができる。このようなものは、両者の領域の外に置かれる知識であり、*that* で表される。

(26)、(27) などの例から、話し手と聞き手の共有の知識はどの領域に属すのかということについては、時間的な要因も作用しているとみなくてはならないだろう。

以上のように、指示物が抽象的なものの場合も要因①で、また図3で、説明されることが明らかになった。しかし、既に述べたように、現実の発話状況の中に存在する具体的な実物を指示するのがダイクシスの第一義的な用法であるから、指示物が具体物である場合が中心にあり、抽象的指示物のケースは、中心のケースが比喩的に用いられたものである。従って、3.1.1. で扱われた *this* と *that* は純粹に要因①で説明されるが、3.1.2. における、抽象的なものを指示する *this* と *that* は、要因①で比喩的に説明されるということになる。

次に、時間的要因が作用する場合に移るが、これは要因①から比喩的に派生されたものである。

3.2. 要因②：時間的に話し手の領域内か領域外か

空間面で示されたことはまた、時間面でも当てはまると思われる。すなわち、時間的に話し手に近ければそれは *this* で、話し手から離れている時は *that* で表される。(28) — (30) を見てみよう。

- (28) And *this* is the year—2015?
(29) M. Poirot, on *that* night a tragedy happened.
(30) ... as I shall be in the neighborhood of Charman's Green on Friday, I will call upon you on *that* day and....

(28) は、タイムマシーンで2015年に連れて行かれた話し手が「今は2015年なの」と尋ねている発話である。*this* は話し手が発話をしている時を指すので、話し手の領域内の時といえる。

一方、(29)、(30) では *that* が生じている。(29) では話し手は過去に起こった出来事について

て話しており、that は過去の時を指している。また (30) では、話し手は未来における訪問の約束をしており、that は未来のある日を指す。このように、that は過去の時、未来の時を指すことができるが、それは、現在が座標の原点にあるのだから、過去と未来とは原点から離れたところに位置することになり、故に、話し手から離れている時ということになるからである。

以上、this と that は時間的遠近を表すのにも用いられることがわかったが、これを図示すると、図 4 のようになる。

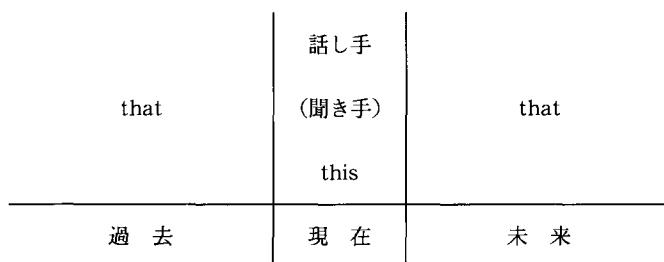


図 4

また要因②は次のように表される。

要因②：時間的に話し手の領域内か領域外か

this: 「今、現在」という座標の原点に位置する時、すなわち、話し手の領域内の時を指す。

that: 過去あるいは未来という座標の原点から離れたところに位置する時、すなわち、話し手の領域外の時を指す。

では、最後に、人間の心理が this と that 間の選択に作用している例を検討しよう。

3.3. 要因③：主体の態度によって決定される話し手の領域内と領域外（心理的に話し手の領域内のものか領域外のものか）

1.3. で述べたように、話し手の領域が主体である話し手の態度によって決定される場合もある。例えば、Lyons (1981) に示されるように、話し手は実際に自分が手に持っている物を指して (31) のように言うことができる。

(31) What's *that*?

ここで that を用いている理由は、話し手がいくら自分の持っている物でも、それを自分に属すものと見做したくない、距離を置いて扱いたい、という気持ちでいるからである。話し手はその指示物を自分の領域内に入れたくないのである。このように、自分の手元にあり、本来なら

ば *this* が用いられるところでも、主体の話し手が自分の領域外にあるものだと見做せば、*that* が選択される。次の例にも、同様の説明が可能である。

(32) Tell me, does *that* seem to you reasonable?

これは長い発話の最後の一文である。話し手はある事件に関する推理を聞き手に聞いてもらい、最後にその推理をどう思うか意見を求めている。3.1. で示されたように、話し手の言ったことは話し手の領域内に属するので、本来ならば *this* が用いられるべきである。ここで *that* が現れている理由は、話し手が自分の推理に心理的に距離を置きたいと考えているからであろう。推理は推理としてあくまでも客観的に、と自分の推理を突き放しているのではなからうか。

(31)、(32) では、現実には話し手の領域内にあるものを距離を置いて客観的に見たいという心理が働くことによって、それが言語表現にどのように具現されるかを見た。次に見たいのは、やはり主体の態度によってどのように話し手の領域が決定されるかについてであるが、(31)、(32) の場合とは性質が異なるものである。

あらゆる発話は話し手を軸として行われ、座標の原点には常に「わたし—ここ—今」が位置するが、1.3. で述べたように、話し手は任意に座標の原点を設定することができ、その設定の仕方次第で、どんな場所でも「ここ」になり、またどんな時でも「今」になり得る。以下の例(33) — (35) はすべて、小説においてこの特徴を利用したものである。まず、(33) を見てみよう。

(33) How could Doc expect him to wear something like *this*?

これは主人公 (“him”) がドクに無理に着させられたジャケットについて思っていることである。*this* は主人公が身に付けているジャケットを指しているものであり、語り手が着ているわけではない。それにもかかわらず *this* が用いられているのは、語り手が常に主人公にぴったりくっついて離れずにいるために、あたかも自分が主人公になったかのように、すべてを語り手の視点を通して見ているからである。すると、主人公の着ているものは語り手の着ているものとなり、語り手の領域内のものを指す *this* が用いられることになる。

この用法は時間を表す *this* にも適用される。

(34) *This* time the envelope yielded a letter

この文が現れている場面は次のとおりである。主人公は配達された手紙を読もうと封を切ったのであるが、中にはまた別の封書が入っていた。このような幾重にもなった封書を忍耐強く開

けていくうちに、やっと手紙が出てくる。(34)はその最後の様子を表している文で、「今度は…」ということである。これは過去の出来事を表しているが、過去の事は、3.2.で示されたように、話し手（語り手）の領域外に属するものであるから、thisが現れるのは不自然に思えるかもしれない。しかしここでも語り手は、自分と主人公とを重ね合わせるように座標を移動させ、過去に原点を合わせているのである。すると過去は、語り手は実際にはいない時点であるが、「今」になり、thisで表される。

最後に、語り手以外の人の行為を指している this の例を見よう。

(35) Miss Lemon ran an eye over the various letters, scribbling in turn a hieroglyphic on each of them.... Having done *this*, she nodded and looked up for further instructions.

(35)の this は、ミス・レモンの行為を指している。語り手はここでもやはりミス・レモンと共にいて、彼女に自分を重ね合わせているため、彼女の行為は自分の行為として、語り手の視点を通して見ているといえる。語り手が現実には自分の行為ではないものを自分の行為と見做す態度は、自分の行為を指すことばをそのまま自分の行為ではないものに対して用いることで実現されるので、語り手はここで this を用いている。

3.3. では、主体である話し手（語り手）の態度によって話し手（語り手）の領域が決定される例を見た。これらの例から要因③は次のように表される。

要因③：主体の態度によって決定される話し手の領域内と領域外（心理的に話し手の領域内のものか領域外のものか）

指示物が場所や時、また具体的なものであろうと抽象的なものであろうと、次のことがいえる。実際には自分の領域内に属するものでも、話し手（語り手）が発話時に自分の領域外にあると考えている（見做す）場合には that が、逆に、自分の領域外に属するものでも、話し手（語り手）が自分の領域内にあると考えている（見做す）場合には this が用いられる。

また、ここで扱われた例はすべて、基本的に図3 [A] / [B] か図4で説明される。

4. 3つの要因間の関係

this と that に関する要因①—③は、here と there に関する要因①—③の場合と同様、中心となる要因と比喩的な要因とに分けられ、そしてこれらの語についてもやはり要因①が中心となる要因で、それ以外は比喩的な要因である、ということになった。

this と that に作用する要因②と③は、要因①から比喩的に派生された要因であるが、要

因① 自体が比喩的に用いられるケースも示された。それは、3.1.で扱われた、指示物が抽象的なものの場合であるが、このケースから次のことがいえる。すなわち、比喩の働く方向について、空間→時間、空間（時間）→心理の方向に、具体→抽象の方向を加えなければならないであろう。

5. むすび

本稿では、まず、空間の場面内指示語 *here* と *there* が DTC 以外の構文に生じているとき、これらの語はどのような要因によって説明されるのかを論じた。*here* と *there* の用いられ方は DTC において最も初期的であるという立場から、この問題を扱った。そして、DTC における *here* と *there* に関わっていた要因のいくつかは、それ以外の *here* と *there* の説明にも深いところで関係すること、そしていかなる場合にもこれらの語に関わってくるのは、話し手の領域の内か外かということであることが示された。

さらに、*this* と *that* についても検討を加えた。これらの語は *here* と *there* と空間的に同じ広がりをもつので、細かい点で異なるところもあるが、基本的には *here* と *there* の要因と同種の要因によって説明される。そして、*this* と *that* の場合にもやはり、話し手の領域の内か外かということがあらゆる場合に関わってくることを示された。

話し手の領域は、空間的（物理的）側面、時間的側面、心理的側面から考えられなければならないが、空間、時間、心理の中で中心にあるのは空間で、時間と心理は空間から比喩的に派生されたものである。やはり「人間は現実生活において、たとえ純粋に空間に関する事柄でなくても、自分をとりまく空間とのかかわり合いの中で考え、それを空間のことで表すことが多い」⁷ということになる。

注

1. 文中あるいは文末に、場面内指示語 *here* か *there* が生じている場合のことをいう。
2. その3つとは、物理的距離、過去か未来か、自分に属す空間（自分のコントロールの領域内）と話し手が考えているかどうかである。
3. 拙稿（1988）「空間のダイクシス」p.117.
4. R. Lakoff (1974) は例 (17) を emotional deixis の一例として挙げ、*that* は話し手の聞き手への共感を示すとしている。しかし、そうであったとしても、のどが聞き手の身体の一部であることには違いない。また、この *that* には、3.1.で (27) などの例に関して述べられる、話し手と聞き手の共通知識の説明が関係すると思われる。
5. ベルグソンは彼の著書『時間と自由』の中で、「われわれは自分の考えを必ず言葉によって表現し、またたいいの場合、空間内で考える」といっている。
6. Leech & Svartvik (1975) は次の文における *this* に対して2つの用法——前方照応的用法と後方照応的用法——を与えている。

This is what I thought.

しかし、例 (18) と (24) に関して述べたことから、この this は次のように説明されるだろう。

前方照応的用法といわれる用法については、this は問題の発話の直前の話し手自身のことを指すので、話し手の領域内に属すものを指していると説明される。一方、後方照応的用法といわれる用法については、this はこれから話し手が述べることを指すので、発話時には話し手しか知らないこと、すなわち、話し手の領域内の知識を指すと説明される。

このように、前方照応的用法と後方照応的用法という、矛盾する2つの用法は、this は話し手の領域内に属すものを指示する、という一つの要因で説明されることになる。

7. 拙稿 (1988) 「空間のダイクシス」 p. 116.

参 考 文 献

- 安藤貞雄. (1986) 『英語の論理・日本語の論理』大修館.
 ベルグソン、H. (1889) 『時間と自由』(平井啓之訳、1975) 白水社.
 ボルノウ、O.F. (1963) 『人間と空間』(大塚恵一他訳、1978) せりか書房.
 Fillmore, C. (1975) *Santa Cruz Lectures on Deixis 1971*. IULC.
 Jarvella, R. J. and W. Klein (eds.) (1982) *Speech, Place, & Action*. Wiley.
 Lakoff, G. (1984) *THERE-Constructions : A Case Study in Grammatical Construction Theory and Prototype Theory*. Univ. of Calif., Berkeley.
 Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Univ. of Chicago.
 Lakoff, R. (1974) "Remarks on *This* and *That*." *CLS* 10. pp. 316-32.
 Leech, G. and J. Svartvik (1975) *A Communicative Grammar of English*. Longman.
 Lyons, J. (1981) *Language, Meaning & Context*. Fontana.
 森光有子. (1988) 「空間のダイクシス」『現代の言語研究』金星堂. pp. 105-18.
 滝浦静雄. (1976) 『時間——その哲学的考察——』岩波新書.
 Weissenborn, J. and W. Klein (eds.) (1982) *Pragmatics & Beyond*, III : 2-3 : *Here and There*. John Benjamins.

引用例の出典

- a. 辞書.
 Chambers Universal Learners' Dictionary. (1980)
 Longman Dictionary of Contemporary English. (1987)
- b. 参考文献.
 Lakoff, R. (1974) "Remarks on *This* and *That*." *CLS* 10.
 Leech, G. and J. Svartvik (1975) *A Communicative Grammar of English*.
 Lyons, J. (1981) *Language, Meaning & Context*.
- c. 小説.
 Christie, A. "How Does Your Garden Grow?" "Yellow Iris" in *The Regatta Mystery*.
 Gardner, C. S. *Back To The Future Part II*.